



挿絵画家とその観点

『挿絵』対『本絵』 要は繪畫一般の素養

木村莊八

『挿絵』は無論『繪』ですから、先づ第一には繪畫一般の意味における諒解なり習得がなければ描けません。世間には『本絵師』と『挿絵師』を區別していふ習ひがありますが、元々からいへば、これはをかしたることだと思ひます。

そこで、本絵師に対する挿絵師といふと、如何にも挿絵師の方は品が下

るやうな聞こえがあります。——しかしこれは事実からいつても多少その卦はないとはいへないことですから、あへて問はないにしても、更にそこから転化一番して、

(A) 挿絵師には挿絵は描けるが本絵は描けない。

(B) 本絵師ならば本絵も描けると同時に挿絵ナンゾは朝飯前に描ける、と。この(A)と(B)の開きをほとんど天地雲泥のやうに描き分けて了ふといふ考へ方をする場合があるやうです。

ところがこれは決して正当な考へといへないので、その(A)はあるひはさうかも知れない箇所があります。しかしその場合には同時に、彼は所詮『挿絵』についても矢張りその味感の最も正当なところは描破出来ないことになるだけで、いはゆる『本絵』の筋を全然持たずになほ且つ充分に描ける挿絵といふ一境地が、元来そんな日陰小路のものではないからですが、——それだけに、(B)のやうに、何でも彼でも本絵さへやつてゐれば挿絵なんぞは描けると、かういふのは、また、認識不足に墮ちます。(A)に対しては(B)も矢張り『本絵師には本絵は描けるが挿絵は描けない』かう同じ口調にしておかなければならない。それがこの際一応は穩当となります。

ただこの場合、双方に但し書きを添へれば、但し(A)挿絵師が本絵を描くのが難しいか? (B)本絵師が挿絵挿絵を描くのが難しいか? といふと、(A)の困難なる場合は、(B)の困難に当然五倍、十倍するでせう。——これは未然に明らかのこととなるだけです。

だから、『挿絵』は何から学ぶべきか？ この問いに対しては、先づ相当期間、本絵の、絵画一般の正道定石を学べ、とかういふ外に言ひ方はありませんが——さて、挿絵道に入るには？ たとへていふと、挿絵の本絵に対する違ひなり比較は、俳句あるひは連句の普通文に対する差別ともいふべきか。その弓爾平波てにおはや助辞文法の道理は所詮定石を通さなければ、当てづつぼうや自分免許の語法では意味を成しませんから、二者同じ道より出ても、句となると、季節が有あつたりして、従つてそれ独特の省略や暗示強調のかど／＼があり、忌み嫌ひ、約束も生じ、文字には使ひ方で特別の音や響きが出来るといったわけで、拙まづひ俳句は、ただ電報の真似事に過ぎなくなるといふ勘定です。

つまり、テキストの指し示す範囲内で仕事をするので絵かきだけの得手勝手を働けないところ、却つて縛られたが故の面白さともいふべきところが持味となります。——ここへ考へ入らないことには、普通文のままは句に成らない。本絵をそのまま挿絵へ持つて行つても直ぐには成立ちません。電報芸術は困るのです。

では、どういう所が果して挿絵のコツだろう？ 定めの紙数を越しましたから短信に止めなければなりません、曰く、挿絵のコツは絵の描き方にあるといふよりテキストの読み方如何にある。

第一に読み方次第。

第二にそれを描いて、そこで初めて生きるものが挿絵らしい挿絵である

元々本絵あつての、その上での小手の味なり、芸なり、一境地なり、面白さなりでせう。本絵よりもちよつと、またむづかしいものだといへば、我田引水、臭味さへ除くと、存外うそではないのです。テキストをどう読むかといふのは？ これは、一口に何なんといつたらいいか——読者の御諒察にゆだねる便法をとりたいと思ひます。

〔報知新聞〕 昭和八年五月二十三日